

理の一部に過ぎなくなる。植物生態地理學の用は主として各區系の同一植物帯内に於ける小なる外界條件殊に土地條件の差によれる植物群落の異なる分布と其性質を論ずるのが主眼である。

## 日本植物大採集家 URBAIN FAURIE 師

### 木梨延太郎

木梨延太郎氏は青森中學奉職中、其地天主教會奉職の U. FAURIE 師と永年親交あり。師に就き見聞する所多し、今回記憶により師の傳記を記されたり。

FAURIE 師(1847—1914)の生れた場所は France 國の南方で、Lyon を距ること南南西16里許りある Hte Loire 縣の Dunieres といふ村で、其の誕生日は1847年(邦曆弘化4年)の1月1日となつてゐるが、實は前年の12月31日の誕生であつて、父が翌日の元日に其の赤坊を教會に携へ行きて洗禮を受けしめ、又役場の届を此の日にしたのである。父の名を CYRILLE FAURIE といひ、農業を営み山林業を兼ねてゐた。此の人は身體が大きく、又元氣者で、世話好きで、村の名物男であつたし、此の村の川の架橋に Faurie 橋 (Pons Faurie) といふのが氏の記念に残されてゐる位である。

師は9歳の時、居村の小學校に入り、12歳で Monistrol の中學校に轉じ14歳で病氣のため中學校を退きて、長兄の製紙工場の手助をなし、16歳から18歳まで特別に France 語の修業をなし、19歳で中學校に再入學し、20歳の時拔擢されて1級を飛び越し、22歳の時も亦1級拔擢され、23歳で宣教師を志願して哲學を修め、24歳で巴里大學の神學部に入り、25歳の時普佛戰爭のため一時郷里に歸省し、戰爭終了の後再び Paris に出で、1873年(邦曆明治6年)3月神學校を卒業し神父の位記を得て、7月2日 Paris 出發、8月21日我が横濱港に到着、同地教會に勤むることゝなつた、正に27歳であつて、此の所にて日本語を習得した。



Urbain Faurie 師 (1906)

横濱に勤務すること5ヶ月にして、翌明治7年(1874)新潟教會に移る。此の新潟滞在中間もなく佛國の植物學者 FRANCHET 氏の依頼によつて、日本植物を採集送附することゝなつた。フォーリー師のフランセー氏に對する第一回の送品をしたのは實に此年で、採集地は新潟を中心とし角田、新津、會津等に及んで居る、是に對するフランセー氏の第一回の發表は實に氏の日本植物誌の成りし年の一八七九年二月二十八日出版の佛蘭西植物學會誌第二十六卷第八十二頁に *Stirpes Novae vel Rariores Florae Japonicae* と題して公にした。此標品は巴里博物館にあるが標品には總て採集年月日を記してゐない。FRANCHET 氏が Paris 博物館に入るに及び、其の緣故で師も亦 Paris 博物館と關係を結ぶに至つた。翌8年東京淺草教會に轉勤を命ぜられ、其處にて特に育兒院の擔當をせねばならぬことゝなつて植物の採集が思ふやうに出來ず、仕事が面倒だし、随分と悲觀し出して東京の地を早く逃げ出したくなつたが、夫れでも8年間の辛抱をされたものである。明治16年37歳で青森縣及び北海道の巡回教師となり、函館を中心として此處に根城を据ゑて、各地を巡回し布教に従事するため、年中出張し居るを常とし、一ヶ所に多くて二三ヶ月滞在してゐた。就中其の主たる場所は札幌、根室、小樽、青森、弘前、三本木、田名部等である。多忙の中に樂みがあつて、本邦北部の地理には此の時に通曉したのである。併かし獨身生活を營む宣教師にはその血氣旺盛な時、種々の病氣に惱まざるゝ如く、師も亦一度は斯かる不幸な境遇に陥られた。

明治28年病氣療養のため、4月長崎出帆歸國の途に就き、病狀輕快と共に瑞、伊、英等の各國を遊歴して専門學者及び博物館を訪問し、歐洲に居ること約1年半、明治29年の11月歸途に上り、30年の1月早々日本に歸着し、爾來青森を定住地として布教に従ひ、各地の巡回教師は免ぜられた。巡回教師を免ぜられたがため、反つて自由の身となり、之れより今まで未踏の地であつた西南日本を濶歩することが出來たのである。即ち、明治30年には兩羽、陸前方面に、31年には日光、富士、伊吹の諸山に、32年には山陰及び九州方面に、33年には九州南部及び四國方面に、34年の6月より10月に至る5ヶ月間は朝鮮に、35年には三陸地方、36年には臺灣及び其の歸途駒ヶ岳、地藏ヶ岳、妙義山、淺間の諸山に、37年には兩羽三陸並に北海道に、38年には青森縣内各地と北海道に、39年には4月より10月にかけて朝鮮に、40年には5月より10月にかけて更に朝鮮に、而して歸來又々樺太に飛び出したれど、既に採集時期の遅れてゐたので、翌41年は6月より10月に及ぶ5ヶ月間樺太に滞在採集した。フォーリー師は如此く日本植物學者と競争して採集をなし山中で時に珍品を見出した時は之をとりつくし、採りつくせざれば後は踏みにじつて行つた。而日露戰爭前

Dec. 1932.

317

は師の標品は日本の學者誰にも分與せず又見せもしなかつたが、戦争後には日本人にも喜んで見せる様になりトリカブト屬植物を中井博士に、イバラ科を小泉博士に夫々要求に應じて自身標品を携へて上京し之を呈出するやうになつた。

42年には4月布哇に到着して採集を始め、其の各島を徧く遊歴採集し、43年7月同島を切り上げて8月青森に歸る。歸來44年より45年(1912年)の6月まで布哇採集品整理のため、兼ねて前年留守中に焼失せし邸宅の善後のため青森に滞在し、仕事の結着を見るや否や、直ちに同年7月出發して、主として東京附近特に高尾山、妙義山、伊豆湯ヶ島等に、翌大正2年7月より9月にかけて再び東京附近と近畿の諸山を採集し、更に11月青森を立ち、南行して臺灣に向ひ、12月着と同時に同地の採集を始め、同3年は全年同島滞在採集、翌4年6月に至り採集途上疾を得、7月4日終に立たず、臺北三板橋の墓地に葬られたり、享年69歳、日本在住42年、而して其の殆ど全部は採集と布教とに費されて我が領土内の土と化せられたのである。師は實に世界稀に見る勢力絶倫の大採集家にして恐らくは師に追従し得るものはなからうと思ふ。我日本にも未だ師に及ぶ程の採集家は出た事はないのは遺憾である。

師は小學校時代も、亦中學校時代も理科に關する學科は只暗誦を課せられたのみで、掛圖や標品の説明があるでなく、況んや實驗實習などは少しもなく、従つて此の方面には少しも興味を持つて居なかつたと告白してゐる。然るに年28歳にして、新瀉教會の宣教師として在勤中に植物學の大家 FRANCHET 氏の勸告によつて、斯く熱心な採集家となつたのは、師が我が國に渡來の當時、佛國では一般に、我が國の狀態が Africa 同様にの蠻地見做されてゐたので、師も夫れに準じて殉教者の覺悟を持して來た、所が實際は我が國が意外に開けてゐたので、此の布教上に盡すべかりし絶倫なる精力が、茲に植物採集に方向を轉換したのである。

師の標品を送つた箇所は、1895年(明治28年)前までは Paris Museum 宛 FRANCHET 氏に届け、1895年と翌1896年とには Paris Museum の外に Herbarium de Museum, Drake del Castillo (Paris), Herbarium Boissier, de Candolle (Geneva), Herbarium Florence (Italy), Kew Museum (England), St. Louis Museum (America) 等である。次で Berlin Museum, St. Petersburg Museum, Vienne Museum (Austria), British Museum, Bryhn Museum (Scandinavia), Stanford University, Harvard University, Yale University, St. Francis University. 等である。

師の標品を調査若くは鑑定せし學者の名を列記すれば次のやうである。先づ歐人にては

CHRIST, ROLLAND BONAPARTE, ROSENSTOCK の諸氏：羊齒類。HACKEL氏：禾本

科。FRANCHET, KÜKENTHAL, LÉVEILLÉ の諸氏：スゲ屬。HENRIE de BOISSIER 氏：毛茛科、虎耳草科、繖形科、石楠科、堇菜科、十字花科等。ARTHER BENNET 氏：ヒルムシロ屬。CRACOVIE 氏：蓼科。JACZEWIEUSKII 氏：スグリ屬。BESCHERELLE, BROTHERUS, CARDOT の諸氏：蘚類。STEPHANI 氏：苔類。HUE, NYLANDER, OLIVIER, BOULY de LESDAIN の諸氏：地衣類。

その他 CLARKE, BONATI, FINET, KELLER, WARUST, SEEMEN, SCHNEIDER 氏等。

尙ほ LÉVEILLÉ 師調査のものは、朝鮮、樺太、布哇の植物全部に Ranunculaceae, Carex, Salix, Polygonum, Quercus, Rubus, Monochlamydeae 等を主とする。

師は頗るせっかちで師の送つた標品に對し兎に角手とり早く返報するものが好きであつた。それでレヴェエー師の如きアマチユア、ボタニストがさつさと早く返事するのを喜んで盛にレヴェエー師に送つたものである。

夫故フォーリー師採品の大部分は唯レヴェエー師如きものにかきまはされたの觀あるは惜しむべしである。

次に邦人にては

早田博士：臺灣植物。中井博士：朝鮮植物。宮部、工藤兩博士：樺太植物。小泉博士：ヤナギ科植物、イバラ科。兒玉學士：羊齒類。牧野博士：羊齒類。澤田兼吉氏：苔類及び蘚類。

等であつて、其の外に筆者に記憶漏れ又は未知のものが澤山あつたことは疑ひない。尤も以上は神戸市山本通四丁目一四六番地 岡崎忠雄氏の義侠によつて大正8年12月師の遺族より師の遺品全部を買収して我が京都帝國大學植物學教室に寄贈せられた以前の事柄である。

師の日本に残せし標品の概數は6萬と稱せられ、其の特徴とすべきは禾本科、スゲ屬、羊齒類、蘚類、苔類乃至地衣類に富んでゐることである。殊に此の標品の貴重な理由は師によりて發見せられた新植物の基準標品 (Duplicate type) の大部分が網羅せられてゐることである、即ち我が日本植物を根本的に研究するに大事な基礎たるべき品に満ちてゐることである。

かゝるものが外國の大學や博物館等の買収するに先んじて 岡崎忠雄氏は我國家學術上の爲めにと數萬フランの金を投じ之を買収して京都大學に寄贈された爲に我國に残つたので、此れは一重に氏の賜である。又採集地に關しては我が日本の領土全體に行き互つてゐるが、更に布哇の採集までも企てらるゝに至つたのは、同島は日本人の勢力範圍であるといふ點からである。此處にも師の氣象の一斑が窺はれる。夫れから一度歸國した時の記念として誕生地 Dunieres や、途中寄港した Hongkong 等のものが少々雜つてゐるし、又 COPELAND 氏より贈られた Philippine のものも

その中に添加されてゐる。

師の標品によりて新種と鑑定發表せられしもの約 700 種、其の内顯花植物と蘚類にて各 200 餘種、地衣類亦 100 種を計へることが出来る。更に師の名を冠せられた種類は約 70 種、師名を帶べる屬名は *Fauria* と *Fauriella* との 2 つあるし、又和名にフオーリーダケ (*Bambusa Fauriei* HACK.), フオーリーササガヤ (*Pollinia Fauriei* HAYATA), フオーリーガヤ (*Schizachne Fauriei* HACK.), フオーリーセツコク (*Dendrobium Pere-Fauriei* HAYATA), フオーリーエゴノキ (*Alniphyllum Fauriei* PERK.), フオーリーアザミ (*Saussurea Fauriei* FRANCHET) 等の數種あるは一般に熟知さるゝことである。

師は性質快活で、元氣者で、誰彼の區別なく自分の思ふ存分を吐漏して仕舞ふ性分なるに、又時々諧謔を弄することも少なくなかつた。夫れで人より思はぬ誤解を受けることもあり、甚だしきは採集地にて刑事探偵に尾行され、又は身體検査をされしことすら度度であり、次の如きは尤も罪のない一挿話である。嘗て日露戦争時分に人々に話して云ふやう「日本の人は今はイクサ(戦争)に熱中してゐる、私は始終クサ(草)のために忙しい、其の違ひは 1 の有ると無いのとである」と。

師は衣食の方には何等外觀を飾らないので破れたり、汚れたり、又は色の褪めた法衣を着て平然として居り、明治 32 年(1899) 3 月 27 日附にて佛國政府から *Officier d'Academie* の榮譽を貰つて、其の當時は胸に略綬を付けてゐられたが、之れも一時の申譯的のものであつて、何時の間にやら、之を付けることを止めてゐたし、自宅にて穿つ短靴は往々後部を踏み潰したもので、一見スリッパ状をしてゐた。此の如く平素極めて儉素で、又磊落で、世事に拘はらぬ師は、標品により得た報酬は、全然布教と慈善事業に之を投じてゐて、常に信者の子弟を小學校及び中等學校に送り學ばしめてゐたもの數名を下らなかつた程であるから、周圍の人々は師に懐き、到る處で人望あり、接すること多き程愈々人の信用を得て、何時も其の地方の愛嬌者、名物男の一人であつた。

師は常に元氣ハツラツ、時としては輕卒らしくも觀られたが、ナカナカ注意深く、能く考ふる熟慮の徳を具へ、従つて先見の明ありと評されてゐた。其の一例としては、師の居住地の青森は、火災の頻繁な所であつたから、師は夙に土藏を建て、之に標品全部と書籍とを貯藏して置いた。果して明治 43 年の大火は不幸にして全市の九分通りを焼き盡くした。此の時師の邸宅も共に此の災厄を免がれ得なかつたが標品貯藏の土藏は猛火に包まれながら漸く祝融氏の災を免るゝことを得て無事であつた。師は此の際布哇の採集で不在であつたが、同年 8 月歸朝早々之が善後

策を講じ、翌44年新に煉瓦家屋を建築し、改めて之に標品を移し納められたことがある、之れ土蔵の荒廢も甚だしかつたからである。又大正2年に入つて急に臺灣の再採集を決心した、それは先年同地採集の際微恙を得た爲、其の旅行も中途にて止めてゐたので、更に他日を期してゐた。而して爾來元氣快復し、朝鮮、樺太、布哇と勢に乘じ、意に任して東奔西走せしも、臺灣を忘れてゐたのではない、併かも近年自分も段々老境に入りたれば今一度臺灣に對する素志を果たしてから、暫時母國に歸りて懐しき近親の誰彼にも逢ひ、又一方には母國にある財産を處分し置きて茲に靜に餘命を我が日本にて、冀くは大阪附近の閑地にて養ひたき希望を抱き出し、夫れで此の年は斯かる目的のために所用を成し遂げ置きて、其の終に近づき臺灣に向ひし所、臺灣の豐饒なる植物に引きつけられて、此の地を去るの期を失し、遂に尊き犠牲となつたのである、悲しい哉。

師は又植物に關することのみならず、常に殖産事業にも注意を拂はれてゐた。師の勸告により西洋蔬菜の栽培を始めた人も多く、又パンの製法、葡萄酒の醸造を人に教へて生業を開かしたこともある。師自らは前庭後園に果樹野菜を試植して人々に之を分與して樂んでゐた。札幌より弘前に移りたる際に、札幌の林檎苗を弘前に移植して其の栽培を勧めたり、又朝鮮採集後には彼地教會に青森林檎苗を送つて、之が栽植を奨励したが如きは其の著例である。されば大正10年のことである、弘前市會にて FAURIE 師の津輕林檎と葡萄に大改良を加へ、又櫻桃を紹介し、蔬菜の栽培に盡力した功績を稱揚し、市費又は寄附金によりて、公園に同師の銅像を建立したいとの、建議案を提出せし議員ありしも、市會全體の容るゝ所とはならなかつたが、兎に角斯うしたことが議題に上せられたことを見ても、同師が産業界の恩人の一人であつたことは疑ないのである。

師は常に謙遜して自分は植物學の人足である、奴隸のやうなものであるといふてゐた、即ち採集家は研究者に對して忠實なる奉仕をなすべきであるとて、各専門者に標品を分配するに、其の質を完美にし、其の分量を豊かにして少しも惜まず、時としては自分の手許に留め置くべき副本 (Duplicate) すら無くして仕舞つたり、又は僅に破片の一部に過ぎざることもある。併かし師の同僚 HERVE 師の語る所によれば、師は師の死後其の標品は永く日本帝國內に留め置くべきものである、而して往く往くは最高學府の手に歸すべきの運命を持つてゐると豫言せられてゐたさうである。死後直に札幌の帝國大學では、宮部博士の注意により、其の植物學教室に日本植物學功勞者として、師の肖像が掲げられ、大正6年臺灣、臺北の林業試験場内に師の銅像が早田博士、澤田兼吉氏等の盡力によりて建設せられ、次で師の唯一の形見た

Dec. 1932.

321

る植物標品其の他遺品が師の憧れてゐた大阪近くの我が京都大學植物學教室に丁重に保存され、今や幾多の英才によりて研鑽を經、尠からざる業績を廣く世に發表されつゝあり、又今までに師の事績を傳へたるものには次の如きがある、即ち

| (日附)    | (著者名)  | (刊行物名)   | (表題)               |
|---------|--------|----------|--------------------|
| 明治38年2月 | 柿崎正義   | 東奥日報     | フォーリ師訪問記           |
| 明治44年4月 | 青森博物學會 | 記念繪葉書    | フォーリ師肖像            |
| 大正2年6月  | 秋蝶     | 東奥日報     | 植物學界の權威            |
| 大正4年9月  | 屠龍     | 聲(公教雜誌)  | 故フォーリ師の事ども         |
| 大正5年8月  | 早田文藏   | 植物學雜誌    | PÈRE URBAIN FAURIE |
| 大正7年2月  | 澤田兼吉   | 臺灣博物學會會報 | 噫フォーリ師             |
| 大正8年12月 | 木梨延太郎  | 東奥日報     | フォーリ師植物標本          |
| 大正9年3月  |        | 大阪毎日新聞   | 驚く可き植物標本           |
| 大正12年7月 | 岡本勇治   | サンデー毎日   | 岡崎忠雄氏とフォーリ師の標品     |
| 昭和3年12月 | 木梨延太郎  | 東奥日報     | 青森に於けるフォーリ師を偲ぶ     |

等ありて師の事業は弘く社會に認められてゐること、思はる。又師の愛撫を受けし子供達は既に成人し、師が多年教化された多數の信者達と共に、師の燃ゆる如き熱誠に化せられ、又師の忠君愛國の思想を受けて各々國民の義務を盡し、各自の職業に安んじて師の餘德を謳歌しつゝあれば、師は何時も莊嚴な態度を以て口にしつゝ、あつた次の言葉の通り「自分の今爲しつゝある仕事は後日のため種子を播いてゐるのである、此の種子の芽を出すのは十年なり、廿年なり、乃至マダマダかゝると思ふ、併し發芽せんものは無い筈で、遅いものでも何時かは遂に發芽するに極つてゐる」といはれた通りに實現して來たのである、師の靈は多大の満足を表してゐること、思はるゝのである。

筆者は尙ほ師の採集地のことや、新種の種類などにつき、他日好機會を得て、改めて記述して見たいと思ふ、茲に擱筆に臨み師の名刺に書せられてゐた肩書を紹介しますと次の通りである。Missionnaire Apostolique, Officier d'Academie, Membre correspondant du Museum de Paris. (完)